ゲンロク 2022年11月号（毎月26日発売）
9月26日発売 No.441 第37巻第11号

Car Entertainment Magazine

［ゲンロク］

GENROQ

2022 NOV No.441 11
定価1100Yen

Ferrari Purosangue

攻めるフェラーリ

［初の4ドア&SUV］

プロサングエ登場!

［ミッドシップ3兄弟の世界］

296GTB／SF90ストラダーレ／F8トリブート

メルセデス・ベンツ特選ショップ

スーパースポーツ最前線

史上最強! ポルシェ718ケイマンGT4 RSの実力

メルセデスAMG ONE初試乗／BMW M8 vs メルセデスAMG GT 53

REPORT●中三川大地(NAKAMIGAWA Daichi)　PHOTO●白谷　賢(SHIRATANI Ken)

HYPER FORGED
ESR & LC5
for LAND ROVER DEFENDER

メイド・イン・ジャパンの切削鍛造技術をバックボーンに、強く美しいホイールを紡ぎあげるハイパーフォージドは、スーパースポーツを筆頭とするハイエンドカー界隈で定番にして最高峰として知られている。その造形美はおろか、色やフィニッシュ、そしてサイズなど、ユーザーのニーズや固有の世界観に応じてきめ細かく仕上げてくれるオーダーメイド体制も広く親しまれる一因となった。そのコーディネートの自在性を持って、今では数多とあるカスタムカーを支えている。

最高品質の6061-T6アルミニウム合金による鍛造ビレットから切削されて生まれるハイパーフォージドの性能と世界観は、しかし決してスーパーカーやスポーツカーのためだけにあるわけではないことを知った。いかにもブロックパターンが猛々しいニット―・リッジ・グラップラーを履いた2台のディフェンダーをハイパーフォージドが支えている。

ラフロードを駆け抜ける
華麗なタフギア

スーパーカーの間ではすっかり定番となったLC5は、リムの中で刃物のように繊細に伸びる2×5本スポークが特徴だ。繊細とはいえそこに弱々しさはなく、9・5J×22インチというサイズ感を持って大口径オフローダーを実現している。フロントをセミコンケーブ、リヤをディープコンケーブとして、その表情を違えるセンスの良さも光る。なお、LC5は19インチから用意されるので、より肉厚なタイヤを履かせてインチダウンしても面白そうだ。

さらに注目したいのは、このたび新作として登場したESRだった。LC5と同じ2×5本スポークだが、そのデザイン性はまるで違う。ホイールデザインの中ではひとつの定番にある星形とも取れる。しかし、決して没個性ではなく、そこにはセンスの良さと高い技術力が宿っていた。

ぱっと見た限りはシンプルに思える。しかし、リムに伸びるスポークに高さを持たせ、奥に向かって斜めにそして縦断面を拡げながらセンターパートへと落とし込む凝った造形だとわかる。これを切削加工で実現するためは、相応の時間と高度な技術が要求されるという。細かく複雑なメッシュ形状を持つLMCよりも多くの加工時間を必要とした。それだけ手間暇をかけた逸品だ。

実際、この10・0J×22インチのスーパーディープコンケーブには、その立体感がもたらす迫力が宿っていた。先のLC5を含めて2台ともブラッシュドブラックアナダイズドとして黒く落とし込んだことで、より凄みが強調されるようだ。いかにも切削加工らしい表面の質感が加わって、無骨なオフロードホイールとしてしっかり成立している。

強さとたくましさを感じるのは、決してデザイン性だけではない。ESRはこれだけ攻めた造形を突き詰めたにも関わらず、VIA規格の適合条件からさらに20%アップの強度を実現したという。防錆性を含めた表面処理の強さも含めて、このディフェンダーのように荒野を駆けめぐる重量級オフローダーに履かせても安心できる〝性能〟が宿る。

それは空を飛ぶような出力性能を持つスーパースポーツを見越した性能でもある。ESRが宿すヴィジュアルと性能、そしてきめ細かく多彩なオーダーメイド体制を持ってすれば、スーパースポーツを含めたハイエンドカーにも分け隔てなく似合いそうだ。ESRは20〜22インチの範囲で多種多様なサイズが揃い、早速、センターロックモデルも用意された。ESRを持ってハイパーフォージドに新章が始まったことを、華麗に引き立てられたオフローダーが無言で訴えかけてきた。

ESR

HYPER FORGED ESR SIZE LIST	
20インチ(7.5J〜15.0J)	19万8000円〜
21インチ(7.5J〜15.0J)	20万5700円〜
22インチ(8.5J〜14.0J)	23万1000円〜

オフロードタイヤを組み合わせたタフギア系にもハイパーフォージドは似合うことを証明するようなコーディネートだ。黒一色の仕上げは泥だらけになってもまた美しそうだ。

ハイパーフォージドにとって約2年半ぶりの新作としてESRが登場した。この2×5本スポークはLC5とはアプローチがまるで違う。時間をかけて丁寧に切削加工することで成し得た立体的な形状が特徴だ。この個体は前後とも10.0J×22インチを装着。新設定のスーパーディープコンケーブとなる。

HYPER FORGED LC5 SIZE LIST	
19インチ(7.5J〜14.0J)	16万7200円〜
20インチ(7.5J〜15.0J)	17万9300円〜
21インチ(7.5J〜14.0J)	21万2300円〜
22インチ(8.5J〜14.0J)	25万6300円〜

LC5

まるで日本刀のように鋭利で美しい2×5本スポークが前後とも285/45R22サイズのニット―・リッジ・グラップラーに組み合わされた。リム、ディスク、そしてピアスボルトも黒一色(ブラッシュドブラックアナダイズド)なのでセンターキャップがより引き立つ。

問い合わせ／ハイパーフォージド　☎072-256-6664　http://www.hyperforgedwheels.com/

REPORT●上之園真以(AGENOSONO Mai)　PHOTO●塩谷佳史(SHIOTANI Yoshifumi)

EURO × Mercedes-AMG G63

メイド・イン・ジャパンの誇り
和魂洋才オフローダー

西海岸の風が吹くような海辺で、漆黒のG63がふわふわ雲を背に佇んでいた。青空の下で、艶やかなボディが照りつける太陽に反射してキラキラ輝く。ひときわ輝きを放つのは、グロスブラックのラッピングで仕上げられた部分。その個体が放つ眩しいほどの存在感に、一瞬にして心を掴まれた。

このG63のカスタムを手掛けたのは、世界のあらゆる国から取り寄せたアフターパーツを駆使して「オンリーワン」を創り出すプロショップ、ユーロだ。「こんなホイールを履かせたい」からオーダーをスタートしても、最終的にはクルマ全体の各パーツが美しくマッチした、理想の一台に仕上げてくれる。今回のオーダーも「ハイパーフォージドの大口径ホイールを履かせたい」から始まった。

過去にCLS63に履かせてジャパンメイド鍛造ホイールの魅力を存分に知ったオーナーたっての希望だったという。24インチのHF-LMCを投入すると、さらなるカッコよさを求めてボディキットから始まる多様なカスタムを加えた。

フロントとリヤバンパー、オーバーフェンダーはZEROデザイン製を採用。ワイドボディを演出するだけでなく、さらにひねりを加えた。それが冒頭に触れたラッピングだ。黒一色で統一されたG63とはひと味違う、光の加減できらめきを変える模様が車体の低めの位置に入っているのがいい。あくまで主張しすぎないところが玄人の魅せるこだわりだ。ただ輝かせればいいってものではなく、スムージング加工で無駄な装飾を一切排除したからこそ、そのきらめきが際立つ。

ワイドボディとのベストバランスを実現するため、少しばかり車高を落とした。ここで使われたのがファーストのダウンサス。50㎜ほどローダウンしただけで、途端にクルマがさらなる力強さと威厳を湛えはじめる。これなら都会のアスファルトジャングルも、郊外のダートバラダイスも、どこにだって難なく駆け抜けていくことができそうだ。

こだわりが詰まっているのは外から見えるところだけではない。マフラーをオフィス ケイのミラクルに変えている。純正の音色も十分に逞しいが、これは一層迫力が加わったサウンドを奏でる。エンジンを始動した時の低い唸り、アクセルを踏み込んだ時に放たれる、これぞG63と言わんばかりの獰猛な叫びがあたり一面に響きわたる。リモコンのボタンひとつで、その時のシーンに合わせて音量を変えられるのはミラクルだからこそ。両サイドからちらりとのぞく、お行儀よく並んだ3本のテールパイプは斜めにカットされていて、外観のシャープさを損なうことなくすんなりおさまっている。

世界中のあらゆるアフターパーツを知り尽くしているユーロに選ばれた代表格たちが、誇らしげにその姿と性能を主張している。かといって、純正が本来持つ固有の無骨さや極地でも耐え得る逞しさを損なうことなく、完璧な調和を見せている。

ここまできて、ふと気づいた。欧州からやってきたこのオフローダーをさらに彩っているのは、メイド・イン・ジャパンの逸品ばかりだ。日本は昔からモノづくりに長けた国として評価されてきた。日本の職人がひとつひとつ丁寧につくったパーツが、欧州車の手となり足となり魂となって溶け込む。実際、このG63にはもうひとつ、芦屋ブレーキ工業が手掛けるマーベラス低ダストブレーキパッドが組み込まれている。最終的に創り出されるのは、もはや国籍を問わない、世界にたったひとつのカスタムカーだ。当初からこの狙いがあったのかをユーロに聞いてみた。すると「特にこだわったわけではないが、コスパを考えた時に最善のものがすべて日本製だった」とのこと。高度な技術力がありながら、それを比較的手頃な価格で提供できるのも、ジャパンメイドの強みなのかもしれない。重低音の余韻を残し、日本の誇りを乗せて、オンリーワンが走り去っていった。

エンブレムにはホイールと同じマットグレーのペイントが施され統一感がある。ブラックアウトのグリル塗装や、バッドフェイス仕様と呼ばれるヘッドライトカバーのワンオフ加工が少々ヤンチャなイメージを演出している。

↓ミラクルはオフィス ケイオリジナルの可変マフラー。設計から製造まですべてを日本国内で行っているのが大きな特徴で、耐熱、耐食に優れた材質を使用している。サイレンサーが小さいため車体下にすっきりと収められる。

↓ブレデシュタイン製24インチの大口径タイヤをたくましく支えるホイールはハイパーフォージドHF-LMC。抜群の機能性とスタイルを兼ね備えた落ち着きのあるデザインは、国内外を問わず多くのファンがいる。

問い合わせ／EURO ☎03-5674-7742 https://www.euro.ne.jp